
n 段階

のみのみの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

n段階

【Nコード】

N6735E

【作者名】

のみのみの

【あらすじ】

超理論的な男子と、姿の见えない女子が、よく分からない場所に連れてこられた。まあ、連れてこられたかどうかすら分からないのだが。そんな二人の、終わりの见えないお話です。毎話、理系な問題を出します。

1 段目

僕は建物の中にいた。

レンガと石の中間の素材でできていて、隙間は泥が詰めてある。

ここに来てから、まだ一步も動いていないのだが、出口は見当たらない。

実は、僕はどうやってここに入ったのかを知らない。

いつの間にかここにいた。

そして、僕の隣から女の子の声が聞こえている。だが、姿は無い。

自称、魂。名は藤原翠子。みどり 僕と同じ 高校の生徒だ。

「ちよつと、聞いている？ これって、何かの暗号よね。何て読むのかな？」

隣の声は、さつきからこの調子だ。

「ちよつといいか」

「なにに？ 分かったの？」

「そうでは無い。僕が聞きたいのは」

「なんだ、つまらないな。橋本君なら分かると思ったのに」

「違う。それは分かっている。だが」

「分かったの？ 教えて」

ずっとこの調子なので、会話にならない。

ちなみに、その暗号というのは、壁に彫ってある式の事だ。そこにはこうある。

『 Arc tan (1 / tan x) = - x 』

多分、 を求めればいいのだろう。

「ねえ、教えてよ」

「分かった。教えるから、僕の質」

「それで、何て書いてあるの？」

「その前に、僕の質問に」

「答えます、よっ」

了解が取れたので、直ちに聞く。

「君は何だ」

「私は私ですよ。それ以上でもそれ以下でもね、ってね」

「それじゃあ、私さん、質問に答えてください」

「名前は、私ではありませんよ」

「さっき君が言った。では改めて質問をする。君はなぜここにいる」

「それはこつちが聞きたいですよ。私も、体と分裂して、いつの間にかここに来ていたんだから」

「君の体は」

「普通の私のみまですよ。精神で繋がってるの」

「ここがどこだかは分からないのか」

「そう言ったじゃない、さっき」

いや、言っていないな。

「でもさ、よくありがちだけど、この暗号を解き明かすと先に進めるのよね」

「ゲームのやりすぎだ」

「違うわ。アニメの見すぎよ」

「論点はそこではない。問題はこの問題の答えを言つと、どうなるかだ」

「だから、先に進めるのよ。もしかしたら、外に出られるかも」

「非理論的だ。そもそも、なぜ僕達はここにいる」

「知つらなくいわよ、そんな事は。ていうか、どうでもいい？」

「どうでもいい訳が無いだろ。僕は君みたいに非日常的な生き物ではないのよね」

「それだったらさ、答えを言ってみたら？」

「そうだな」

「あゝ、あつさり引いた」

「それは勿論、君との論争が非生産的だからだ」

「ぶにゅ」

そう言いながら、頬を膨らましたように感じた。認知できないの

だから、分かるはずが無いのだが。

「答えは、 〃 / 2」

僕が言うつと、体が白い光で包まれた。

1 段目 (後書き)

今回の問題は逆三角関数。大学で、公式『 $\text{Arctan } x + \text{Arc}$
 $\text{tan} (1/x) = \pi/2$ 』を習った人なら解けるはず。

2 段目

確かに、僕は答えを言った。 / 2と。

そして、白い光に包まれた。

しかし、目の前にはさつきと同じ風景が広がっている。

まあ、そもそも答えたところで何にもならない、という可能性が高い。

「ね〜え〜、ホントにさつきのつて、合ってるの?」

「合っている。間違いは無い」

「実は、違ってたりにして?」

「否定しきれないが可能性は零に限りなく近い」

「でもさ、何にも起きなかつたもん。絶対、違う」

「君はなぜ一次元で物を考える」

「イチジゲン?」

「つまり、一視点という事だ」

「イツシテン?」

「だから、一つの考え方しか出来ないのか、という事だ」

物分かりが悪い。苦手だ。

「ここでの論点は、問題の答えではない。ここがどこか、どうすれば出られるか、この式の意味は何か。この三つだ」

「ほえ?」

そう言ったきり、それは言葉を発しなくなった。

僕は落ち着いて考える。

そもそもここはどこか。ここに来る前の最後の記憶は・・・覚えていない。記憶が曖昧になっている。学校からの帰り道だったかもしれないし、登校中だったのかもしれない。あるいは寝ようとしていたのかもしてないし、起きたところだったのかもしれない。

次に、どうすれば出られるかだ。試に壁を押ししてみる。硬い。古城の壁、と言った所か。壁を壊す道具は無いだろう。荷物は何も持

っていない。

となると、やはりこの数式が何らかの意味を持つのだろうか。

そう思い、もう一度壁に書かれている数式を見てみた。

そこに書かれていたのは『 $\sum_{k=1}^n \sum_{i=k}^n i^k$ 』

「おい、ここはさっきまでとは違う場所らしい」

そう藤原に言ってみた。

「どうして分かったの」

「数式が変わっている」

「どれも」

そう言ったきり、声が聞こえなくなった。

僕は式の意味について考えてみる。

多分、『 \wedge 』は指数という事だから、シグマに付いている方は上に書く文字の事を言っているのだろう。『 \lfloor 』は下に書く字の事だろうか。

そう考えるとこれは、1からnまでのそれぞれを乗数とした虚数単位の和、という事になる。

虚数単位 i の2乗は -1 。3乗は $-i$ 。4乗は 1 。

四つに条件分けをすれば簡単か。

「これって、数式なの」

どこからか声が聞こえてきた。

「ああ、恐らくそうだ。意味としては、1からnまでのそれぞれを乗数とした虚数単位の和、ということだろう」

「ほえー。で、その心は」

「そんな振りに乗ってやるような気概は、生憎ない。もう少し考えさせてくれ」

「ぶー」

抗議の声は無視する。

nが4の倍数なら、解は0か。nを4で割った余が1なら解は i 。その余が2なら解は -1 。3なら解は $-i$ 。

これで合っているだろう。

「答えは、 n を4で割った余が0なら0、1なら i 、2なら $i-1$ 、3なら -1 」

僕がそう言つと、この前と同じように体が白い光で包まれた。

3 段目

光がなくなっても、そこは前と同じような場所だった。

「同じ」

声は無視して数式を確認する。

『 $\cos 36^\circ$ 』

変わっていた。

「違う」

「何が言いたいんだ」

「何も」

「ならば、何も言っな。煩いだけだ」

「分かった」

これを求めること自体は簡単だ。

等式 $\sin 2 = \sin 3$ を解けばいい。そうすればすぐに c

$os = (1 + 5) / 4 = 36^\circ$ という答えがでるはずだ。

それにしても問題が簡単になっている気がするのはいのせいだろ

うか。

一問目は逆正接関数の問題、二問目は虚数と等比数列の和の問題。

そして三問目が余弦関数の問題。

共通点としては、数学の、いや正確には計算の問題だということ。

それほど解を出すのに手間取らないということの二点だ。

まだヒントが少ない。

折角だ。不本意だがこの建物を探索するか。

「どこ行くの？」

立ち上がると、藤原が聞いてきた。

「探索だ」

「私も行く」

見えない体だ。付いてこようがこまいが僕には関係がなかった。

あえて言うならば、煩いか煩くないかの違いか。

万が一迷った時のための保障として、この通路の右側に手を添えて歩き出す。所謂、右手法だ。

今更ながら気付いたが、着ているものは制服、履いているものは皮靴だった。鞆は見当たらない。学校帰りだったのだろうか。

そんなことを考えているうちに角に来た。右に曲がる。ここまで40歩。

「長いね。疲れない？」

「問題無い」

「そーなんつすかー」

それが言いたかっただけか、これは。

また角に来た。右に曲がる。ここまで80歩。

しばらく歩くとまた角にきた。ここまで81歩。

そしてまた角。ここまで80歩。

40歩進むと壁には『 $\cos 36^\circ$ 』と書いてあった。どうやら元の場所に戻ってきた感じた。

僕の歩幅が72cmだから、この建物は一辺が約57.6mの正方形ということか。

「何か分かった？」

「君は、もう少し生産的な事を言えないのか」

「む〜」

何も無かった。それだけだ。均一な壁、床、天井。音もそれほど響かず、臭いも感じられない。空気も人体に影響を与えるような感じではない。

「そうだみよ、この壁の向こう、空洞だったよ。上と下にずーーー
ーっと続く」

正方形の内側のことだろうか。

「こつちか」

「うんうんうんうんうん」

「どうやらそうらしい。」

「なら、外側はどうだった」

「うーん、分かんない」

「そうか」

さて、どついうことだろつが。

「(1 + 5) / 4」

「あつ、ちよつ」

僕は光に包まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6735e/>

n段階

2010年10月8日21時43分発行